
あなたの瞳のその向こう

黒崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの瞳のその向こう

【Nコード】

N80100

【作者名】

黒崎

【あらすじ】

大切な人を失った快斗は、青子と容姿のよく似た蘭に声をかけてしまう。工藤新一の姿で。しかしそんな事をコナンが許す訳がない。コナンはコナンの姿で蘭を引き留めることはできるのか？青子を求める快斗と新一を待ち続ける蘭。あなたが本当に求めているのは誰なの？

青子ちゃん死ネタです。カップリングは新蘭、快青ですが、一部快蘭要素があります。苦手な方はご注意くださいませ。

コナンは話の途中で新一に戻る予定です。

なお、このあらずじ及び注意文は予告なしに変更されることがあります。

4/7 追記）拳銃で撃たれるシーンがありますので、「残酷な描写あり」とさせていただきます。自己責任でお願いいたします。

1 プロローグ（前書き）

青子ちゃん死ネタです。カップリングは新蘭、快青ですが、一部快蘭要素があります。苦手な方はご注意くださいませ。

なお、この注意文は予告なしに変更されることがあります。

1 プロローグ

「快斗！もー、早く起きてよ！」

「んー後五分…」

「バ快斗！もう青子知らないからねー！」

いつものやりとりで目を覚ます。

もう知らない、と言いつつもなんだかんだ待ってくれる青子の怒る顔を見ながら、パンをかじり、急いで家を出る。

「おいアホ子！急がねえと遅刻するぜ！」

「なによー！誰のせいだと思ってるのよ」

学校に着いたら着いたで、授業を適当に聞いて、くだらない話をして、放課後は遊びに行ってる…。

そんな、俺たちの日常。

今から思えば、いつも側には青子がいた。

思い出として思い出されるのは、いつも青子の笑顔なんだ。

屈託のない笑顔を向けて「快斗！」なんて呼ばれたら、つい照れ隠しに「んだよアホ子！」なんて言っただけでまた青子を怒らせてしまっていたけれど。

本当は気づいていたんだ。

青子を見て、真っ赤になりそうなのを必死に隠してポーカーフェイスしようとしている自分が一番アホ面だったこと。

俺は、本当に、青子が大好きだったんだってこと。

今はもう、愛する事なんて許されないけれど…。

最後に一度だけ、この弱い俺を許してほしい。

「青子…俺も青子のこと好きだぜ」

2 落ちる

「ああ、もう！いくら調べても埒があかねえ！」

月下の奇術師、怪盗キッド ポーカーフェイスで無数の声色と顔を使いこなし、神出鬼没で大胆不敵の怪盗紳士、と言ったら、いまや日本に知らない人はいないのでと言われるほどの知名度だ。そんな怪盗キッドの気配を、微塵も感じさせない少年がそこには居た。

しかし、彼が世間を騒がす大怪盗だということは紛れもない事実だった。

怪盗キッド…もとい、黒羽快斗はポーカーフェイスも形無しに苛立ちを表に出し、膨大な量の資料を前に、心が折れかけていた。見かねた寺井もアイスココアを差し出しながらつい口を出す。

「快斗坊ちゃん、少しお休みになられたらどうです？もう3日も殆ど寝ておられないでしょう。もし快斗坊ちゃんに何かあったらわたくし、盗一様になんてお詫び申し上げればよいかな…」

「今立ち止まったらダメなんだ！じいちゃん。知ってんだろ？ボレ―彗星はもう1ヶ月後に迫ってんだ。このままじゃ…間に合わねえ…！」

「坊ちゃん…」

寺井は複雑そうな、悲しむような顔で快斗を見た。

「ああ…。怒鳴っちゃってわりい、寺井ちゃん。次のビッグジュエルがパンドラかもしれないし、いつ何が起きても不思議じゃない。寺井ちゃんの言うとおり、少しは体も休めるようにするから！」

「次のビッグジュエルといいますと、来週東都美術館に展示される“クリアデイズ”ですね。」

寺井が床に散らばった紙を眺めながら問うと、快斗は画面から目を離さず、PCのキーボードを打ちながら答えた。

「そ、何でも、ものすごい密度で透明度の高い、超一級品のダイヤらしい。予告状はもう出してある。多分、今夜あたりマスコミでも報道されるはずだ。」

「この山、嫌な感じがいたします。坊ちやま、くれぐれも慎重に…」

「……大丈夫だって！じいちゃんの心配性は相変わらずだな。この黒羽快斗様に見ればこれぐらい危機的状況のが燃えるってもんよー！」

快斗は、寺井の心配ぶりを見て、わざと明るい声を出す。

「ほら、いい加減年なんだから心配ばっかしていると体に悪いぞ？…わざわざ俺の部屋まで手伝いに来てもらって悪かったな。助かったよ。俺もちょっと休むから、じいちゃんも戻っていいぜ。」

「分かりました。快斗坊ちゃん、決して無理してはいけませんよ！
またお手伝いできることがありますたら直ぐに呼びください。」

「おう！…。」

寺井が、部屋から出て行き、思わずため息がでた。

「…どんな時でもポーカーフェイスを忘れるな…か。」

一ヶ月ほど前から、快斗は必死で組織の情報を掴むために駆けずり回っている。

少しでも関係のありそうな資料なら片っ端から拾い集め、そのために結構無茶もした。

その成果は、何十個ものUSBメモリと、何百、何千ものコピー用紙に収められ、部屋に広がっている。

快斗は、その膨大な量の資料から、使えそうな情報を探し出すという、気の遠くなるような作業をしていた。

なにぶん、不老不死がどうたらいうような、常識では量れない組織なのである。

何が組織への手がかりになるのか、慎重に見極める必要があった。

神経をすり減らし、ほぼ三日間不眠不休の快斗は、頭痛、立ちくらみ、目のかすみなど、自身の体からの抗議を受け、ベッドに体を沈めた。

「しかたねえ。俺もちょっと休むか。明日は学校行かねえと、また青子がうつさ…あ、そういえば母さん学校に連絡してくれたのかな

…」

そして、思考の途中で意識を手放し、深い眠りに落ちていった。

それが、最悪の方向へ動き出すことになるとは知る由もなく。

2 落ちる（後書き）

はじめまして。

黒崎と申します。初投稿です^^
やっと投稿出来ました！

読みづらい、わかりづらいところがありましたらお気軽にご指摘
くださいm(_____)m
更新ペースはそんなに早くないと思いますが、気長におつきあい
だされば幸いです！

20101108

3 聞きたくない

何か一つどこかが違えば、こんな最悪の事態にはならなかった。しかし、今更悔やんだところでどうにもならない、それは誰にでもわかることだった。

「あれえ？呼び鈴押しても誰もでないや。快斗のお母さん、お買い物かな？」

青子は学校を3日連続で休んでいる快斗の様子を見て、家まで来ていた。

「先月も結構休んでたし…快斗、大丈夫かな？呼び鈴にも応じないなんて…ちょっと悪いけど、心配だから、様子みていこうかな」

青子はドアプレートの裏に隠してある鍵を取り出し、鍵を開け、少しだけ扉を開いて家の中に呼びかける。

「快斗ー？生きてるー？」
返事はない。

「…寝てるのかな。…快斗ーあがるよー！」

一階に人影はなく、家の中は静まり返っていたので、青子は二階に上がり、快斗の自室のドアをノックした。

「入るよ…快…斗？」

ドアを開いた青子が見たものは、大量のコピー用紙とつけっぱなしのPC、そして死んだように眠る快斗の姿だった。

PCの画面の文字は英語で書かれていて、すぐには理解できなかったが、何枚か張ってある画像には見覚えがあった。

「ビッグジュエル…？」

青子は部屋の中に一歩踏み出し、足元に散らばっていた紙を何枚か拾う。

「ブルーバースデー…グリーンドリーム…ブラックスター…今まで怪盗キッドが盗んだ宝石ばかり…」

そこには、今まで怪盗キッドが盗んだ宝石が写真と解説を加えて数枚の紙にまとめて印されていた。

見たこともあるはずだ。どれも自分の父親が必死になって守ろうとして、それでも盗られてしまった宝石ばかりなのだから。

「なんで…快斗がこんなものを…まさか、快斗…」

どうして、怪盗キッドが盗んだ宝石の資料を快斗が？青子の、大嫌いな大泥棒。

嫌な汗がでる。耳鳴りがする。体温が上昇する。

青子の不確かな、それでいて妙に信憑性のあるその推測は、自身の手を汗ばませた。

ううん、そんなわけない。そう自分に言い聞かせるかのようにページをめくる。

最後のページに記されている宝石には見覚えが無かった。

「…クリアデイズ…？」

青子が呟いたそのとき、今まで深い眠りに落ちていた快斗が急に目を覚ました。

快斗が凄い勢いで起きあがったので、青子は反射的に持っていた資料を、床に捨てるように手を離れた。

「っん…あつ青子!？」

「えっあつ!」

一瞬で意識が覚醒した快斗はベッドから驚くほどのスピードで飛び出し、そのままの勢いでドア付近にいた青子の腕を捉え、引っ張り出すように部屋の外にでた。

「おい!青子!人の部屋に勝手に入るなよ!!」

部屋のドアを乱暴に閉め、驚く青子に怒鳴りつける。

青子は、驚いたような、怯えたような目を快斗からそらし、俯いてしまった。

その瞬間、快斗はやってしまった、と悟った。いくら寝起きでパニックっていたとはいえ、こんなに慌てれば、どんなに鈍い人でも何かあるのかと疑うだろう。

ましてや部屋の中にはうかつにも、致命傷になりうる資料が散乱していて。

自分が目覚めるまでに何を見られたのかもわからない。

「あついや……」

「快斗は……」

快斗の弁解を遮るように青子が言葉を発した。

表情が見えない今、言葉だけで青子の感情を読み取ることは難しかった。

しかし、次に続く言葉は良いことではないだろうことは快斗の勘が人並みはずれていいということ抜きにしても分かり切っていた。

異様に回転の良い頭が勝手の次の言葉を予想する。

そして、はずれてくれと願う。

「快斗は…怪盗キッド…なの？」

3 聞きたくない（後書き）

青子ちゃんを失った後から物語を始めても良かったのですが…

快斗の心理を描写するにあたって、ちゃんとお話をつけた方がいいかなと思って書き始めたら、結構たどり着くまでに時間がかかってしまいました。

多分あと二話で青子は…苦手な方は逃げてくださいね！m（――）
m

お気に入りしてくださった方ありがとうございます！

1人でも読んでくださる方が居る限り頑張って書き続けます

1 0 1 0 1 1 0 9

4 嘘

一番聞きたくない人から、一番聞きたくない言葉を聞く。

（落ち着け、俺。大丈夫）

快斗は自分に言い聞かせ、慎重に言葉を選びつつ、かつ、それを悟られないように頭に浮かべた言葉に声を乗せる。

「…そうだよ、青子。俺が、怪盗キッドだ。今まで、騙してて、ごめん。」

「え…？」

否定の言葉を待っていた青子の目が見開かれる。

「嘘…。」

一瞬見開かれた大きな瞳はその言葉を拒否するように細められ、あつと言う間に涙がたまっていく。

表面張力で保たれた危うい水面のように、何か少しの刺激で今にも

こぼれ落ちそうだ。
そんな青子をみて、快斗はにかつと場違いな笑顔を見せ、こう言い放った。

「…正解！嘘でした！」

急におどけた快斗はポンつと“大正解”とかかれたカードと紙吹雪を飛ばす。

「え…！？」

涙をためた大きな瞳が丸くなる。
言葉の意味が理解できない。

「バー口、俺が怪盗キッドなわけあるかよ！だから青子はアホ子なんだよ！」

快斗は大げさに肩をすくめてため息をつく、
ないない！と首を振っている。

口をパクパクさせて驚いている青子は未だ次の言葉が出てこない。

「おい、青子！聞いてんのかー？」

にししと笑って青子の顔の前で手を振る。

「……でも……！快斗の部屋に……そうよ！快斗の部屋にあった紙はいったい何なの？！青子、見たんだから！今までキッドが盗んだ宝石が乗ってる……」

否定して欲しかった疑いとはいえ、一度疑ってしまったら疑念をすべて払えるまで簡単には信じられない。

泣くのを必死にこらえてまくしたてる青子の言葉を快斗は遮った。

「だーかーら！調べてたんだよ！怪盗キッドについて！」

「調べてた……？」

「そ！ちよつと興味あつてよ。つつーか、青子！花の男子校生の部屋に勝手に入つてくるとかどつという神経してんだアホ子！」

いやーん、とおどけて肩を抱いてみせる快斗。

バ快斗っ！って、また怒るかもしれないけどこれできつとまた笑ってくれる……そう快斗は信じていた。

しかし、青子の反応は正反対のものだった。

「信じていいんだよね？…よかった。怪盗キッドじゃなくて本当に良かった…っ」

「！」

青子は泣いた。消え入りそうな声で泣いた。

よかった、快斗がキッドじゃなくてよかった、そう言って泣いた。

「…っ！つなに泣いてんだよ！俺がキッドなわけやねーだろ！」

快斗は笑った。そして、泣いた。心の中で。

口は軽口を叩いても、心の中は今すぐにでも逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

嘘をついたという罪悪感。

今この瞬間も嘘をつき続けているという情けなさ。

そしてなにより、怪盗キッドじゃなくて本当に良かった。この言葉が、快斗をより惨めにさせるのだった。

（絶対に終わりにしてやる。もうこれ以上こいつに嘘をつき続けるのはやめにしよう）

自分に誓う。

全てを終わらせたなら、真っ先にこいつに会いに来よう。

そして、嘘をついたことを謝ろう。

許してはもらえないかもしれないし、拒絶されるかもしれない。それは死ぬより怖いけど。

嘘を付き続けて平気な顔でこいつのとなりにいられるほど、自分は

できた人間じゃない。

「青子…もう少し…待ってくれないか？」

独り言のように呟いた快斗の言葉は、泣きじゃくる青子には聞こえていなかった。

4 嘘（後書き）

展開を急いでる感をなくしつつ、急ぎたかったんですが・・・（笑）
むずかしいですねゝ〇<

それと、前回の後書きで後二話で青子が…的なことを言いましたが、
二話では無理そうです（嘘ついてすいません）

ポイント入れてくださった方、ありがとうございます
早く続きを書きたくなりました（ノ。<＊）ぽっ

1 0 1 0 1 1 1 0 わぁ1ばっか（笑）

5 気になること

青子が泣いたその日の夜、快斗はすべての資料を隠し部屋にしまった。

最初からこうするべきだったかもしれないが、隠し部屋は寺井と二人で大量の資料相手に作業するには狭すぎる。

それに、誰かお見舞いに来た場合は、風邪を移しちゃうといけない、という建て前で部屋には入れさせない手筈になっていた。

（もう少し考えていればこういう可能性があったことぐらい予想できたはずだ。）

しかしいくら後悔しても前には進めない。

快斗は一週間後に控えた予告の日に備え、準備を進めた。

次の日の朝、快斗は奇妙な違和感を覚えた。

まず第一に、新聞を見てもテレビをつけても、怪盗キッドのニュースが一つも無いこと。

マスコミに直接予告状を送りつけた時をのぞき、予告状は警察に届いてから約1日のタイムラグがあった後公開され、各局の一面を飾る。

一日のタイムラグがあるのは、模倣犯ではないことを確認するための時間だろう。

しかし、快斗が警察に予告状を送りつけてからもう二日半が経とうとしている。

（警察の情報操作：あのへボ警部、なに考えてんだ？しゃーねえ、ちよつくら探りいれてみつか）

新聞をたたみ、快斗は半歩先を歩く青子を見る。さすがに四日も学校を休むわけにはいけないので、仕方なく登校しているところである。

（もうひとつ、こいつも気になる…）

そう、快斗の感じたもうひとつの違和感とは、昨日泣かせてしまった愛しい幼馴染についてだった。

青子は昨日さんざん泣いた後、「変なこと言っちゃってごめん！忘れて！！」と言って帰っていったのだが。

（信じてくれた…と思う。）

信じてもらっても、それに答えることが絶対にできないことは辛いけれど、青子は確かに自分を信じてくれた、ずっと青子のそばに居た快斗だ、そこには身勝手な自信があった。

だけど、何か…。

今は、青子の後ろを歩いているので表情を伺うことはできないが、うつむき、早足気味になっている。

なにより、普段あれだけ元気な青子が、自分から一言も言葉を発しない。

「おじさんくさいから歩きながら新聞読むの、やめてよね!」と、叱咤の一言でも飛んでくるのが常だから、妙に居心地が悪い。

そう思い返せば、青子はいつも通り「おはよう!快斗」と迎えにきたが、その顔色はあまり優れていない様子だった。

忘れて、といわれた手前、昨日の話はあまりしたくないのだが、少し様子を見る意味でカマをかけてみる。

「おい、青子。具合でも悪いのか?俺の風邪、うつったんじゃないか?ちよつと、見せてみるよ」

実際、快斗は風邪なんて引いていなかったからありえない話ではあるが。

「おい?」

快斗は、先を歩く青子の肩を掴んで引きとめようとした。肩を掴まれてびくつと震えた小さな背中。

「あ……」

振り向いた青子は、戸惑ったような表情を見せた。

「おい?青子?どうしたんだよ?」

「あつ!学校!遅刻しちゃうじゃない!バ快斗!!ほら、走るよ!」

「え!?!」

快斗が意味もわからず啞然としている隙に青子は走り出していた。結局ぎりぎりですぐに学校にたどり着いたが、結局青子の妙な態度のわけはわからなかった。

それから5日間、快斗は組織について調べつつ、警察の動きを掴むために時間を費やした。

これ以上休めば進級に響くし、青子の不審を仰ぐのを防ぐため学校には一応行っていた。

しかし、青子は妙によそよそしく、快斗も学校に行っている間は睡眠時間に充てていたので、会話らしい会話はなにもまま過ぎて行っただけであった。

5 気になること（後書き）

お読みいただきありがとうございますm（――）m
なかなか思い通りに事が運ばないというか、進めたいところまでな
かなかたどり着けません；

蘭ちゃんと江戸川君はもう少しで登場するかとされます。

一話一話の量が少ないせいか、このままではエンドまでに話数かも
のすごいことになりそうです（笑）

もう少し一話を多めに書いて更新頻度を下げるか、このままで行く
か、迷います；

20101113

6 信じたい（前書き）

長い間更新が滞り、感想、メッセ等いただいた皆様には大変申し訳なく思っております。

すみませんでした。

絶対に完成させますので、気長にお付き合いいただければと思います。

6 信じたい

今日は怪盗キッドの予告の日。

しかし、それを知っているのは極わずかな人間だけだった。

快斗の調べによると、今回その事実を知っているのは、東都美術館の館長、オーナー、警察の一部…もちろん中森警部もその一部に含まれているわけだ。

なぜ、情報を公開せずに情報操作しているのかまでは調べることはできなかったが、今回は中森警部の気合がいつも以上に入っているということが、飛ばした鳩につけた盗聴器から伺うことができた。

「大方、現場に居る人数を減らして変装されるリスクを減らしたいってところか…」

予告は夜9時。現在5時。

東都美術館はいつも通り7時に閉館し、そのあと警備がしかれるはずだ。

すでに東都美術館には何回か訪れ、見取り図も頭に叩き込まれているが、今回の獲物……クリアデイズ……が公開されるのは今日が初めてなので、快斗は昼間に下見に見に行った。

私服警察官がうじゃうじゃしていることが気配からわかり、今ばれることは無いと思いつつも居心地が悪かった。

（さて、準備しますか！）

4時間後のショータイムにそなえて…。快斗は大詰めの準備をはじめた。

ちょうどそのころ青子は、愛しい快斗のこと、そして大嫌いな怪盗キッドのことについて考えていた。

「どうして…？ 偶然、なんだよね？ でも… 青子、信じたいんだよ？ 快斗…」

怪盗キッドなんて、大嫌い。だって、宝石を盗んで返すなんて、ただの愉快犯じゃない！

お父さんなんて、いつもボロボロになって帰ってくるのに…人を馬鹿にして楽しんでるんだわ！

大切な幼馴染に熱弁した、自分の言葉が蘇る…。

6日前、青子が快斗の家で大泣きして帰った夜、父親であり、キッドを追う刑事でもある中森銀三は青子にこう告げた。

「青子、すまんが、ワシはしばらくうちへは戻れなくなると思う」

「怪盗キッドから予告があつたんだ。青子、これは誰にも言うなよ。次に奴が狙う宝石はクリアデイズというのだが、こいつは今までの宝石とはわけがちがう。狙っているのは奴だけではないという情報もあるし、危険な山になるかもしれない。怪盗キッドが予告したことは情報規制されるが、何故今、ワシが青子に話したのかはわかるな？」

青子は黙って聞いていた。
そして黙って頷いた。

「何、大丈夫。今度こそ奴をお縄にして、無事に帰ってくるから。」

銀三は苦笑いしながら、コートを羽織る。

青子は、黙ったまま青くなっていた。

自分の父が危険にさらされることも、もちろん気にかかることではあるが…。

どうして快斗がクリアデイズの資料を持っていたの……？

だって、おかしいわ！お父さんだって、今日クリアデイズが狙われるって知ったのに。

それに、報道規制もされているみたいだし…。

6 信じたい（後書き）

いろいろと言いつけはあるのですが、前回の投稿から4ヶ月もあいてしまい、本当に申し訳ないです。
でも、絶対に完成させます。

以前から読んでくださっていた方、ぜひ、読んであげて下さい（>
< ; ）
はじめましての方、ぜひ、気長にお付き合いください。

次話は、明日（4 / 7）の18時に投稿予約してあります。

7 名前を呼んで（前書き）

*まじつく快斗をお読みでない方へ

スネイクⅡパンドラを狙う組織の幹部

7 名前を呼んで

今回の獲物、クリアデイズは、東都美術館最深部の大広間の真ん中に設置されており、見た目は普通のガラスのショーケースに入った、良くある展示方法だった。

大広間は三階分の吹き抜けになっており、天井にはステンドグラスが使用され、夜は月明かりが差し込む。もちろん警備は電気を付けて行われるが、月明かりだけでも十分その宝石の透明な姿をみることができる。

今回の作戦は、まず、予告時間前に入り口の警報機を誤作動させ、入り口を警戒させている隙に大広間の警官に紛れ込む。その後大広間を停電させ、宝石を偽物とすり替える。自家発電に切り替わったあと、偽物の警備を続けるふりをして抜け出す算段になっている。いつもよりぐっと少ない警備員のなかに紛れるのは容易ではないが、やるしかない。

吹き抜けのステンドグラスを割って天井から派手に逃走することも考えたが、当然屋根にも警備が回っていると思われるので、最終手段だ。

顔を見せて挨拶出来ないのは、気に入らないが、今回は情報が少なく、現場で臨機応変に作戦を変更させる必要があった。

しかし、計画は大幅に狂った。いや、最初からそんな計算はもう使い物にならない状況だった。

怪盗キッドが東都美術館に侵入したとき、警察は壊滅状態だった。入り口の警備員は確かに警備をしていたが、中にいる警備員のなかには、気絶しているものや血を流して倒れているものもいた。

何者かが、外に居る警備員、そして様子を伺っていた怪盗キッドの

目さえすり抜けて、内部をめちゃくちゃにしたということだ。

「…なにが起きたんだ！」

イヤな予感がした。

走って大広間に向かう廊下の隅で、倒れた中森警部が唸っていた。

「警部！何があっただんです！？」

「あ…おこが…うつ…いやつら…危険…」

「…まさか…」

昔から、イヤな予感はいたい当たった。

毎回間違ってくれと願いながら。

大広間に走る。明かりが消え、月明かりのみがてらすそこには…。

「お嬢さん、ここは危ない。すぐに逃げましょう！」

ショーケースの前に立つ、青子の姿があった。

青子は俯き、ガラスウィンドウを指差して、感情なんて感じられない声でいう。

「怪盗キッドさん、これ、開けてください」

「…え？お嬢さん？」

キッドが一步青子の方へ踏み出した瞬間。

「そして、中のものをワタシに渡すのだ！」

「！？スネイク…お前…」

青子に気を取られ気づかなかったが、ショーケースの奥、壁際には、ピストルを向けたスネイクがいた。

唇を噛んだ。血が出るほどに。反省という言葉じゃ軽々しく聞こえるほど、さまざまな状況が頭を巡る。そして、これからどうするべきか。

「早くしろ、でないと大切な恋人が屍になるぜ？」

スネイクの言葉に従い、青子の隣にかがみ、ロックの解体にかかる。組織には（力技では）開けられなかったようだが、怪盗キッドが開けるのに、時間はかからなそうだった。離れたスネイクに聞き取らないよう、わざと作業の音を大きくし、声を潜めて青子に話しかける。

「お嬢さん、これが終わったら、すぐに私のうし……」

「そんな呼び方やめてよ！快斗……あなたなんでしょう？」

青子が言葉を遮り、声を上げる。スネイクの目つきはするどくなる。驚いて顔をあげると、涙をほほに伝わせ、肩を震わせる青子がいた。

「もう、辞めさせてあげるから……青子が助けてあげるから……」

青子は泣きながら、優しく微笑んだ。

「……っ！」

その瞬間、ウィンドウは開き、キッドはクリアデイズをスネイクの方へ、ワザと外して思い切り投げた。キッドが同時に青子を抱き締めるようにして庇った。スネイクは発砲した。

パシユッ

パシユッパシユッパシユッ

「あおっ……っ！」

青子を守られようとせず、“快斗”を突き飛ばした。

弾丸は、青子の心臓に突き刺さる。

続く銃声：青子の倒れる音、駆け寄る自分。スネイクの銃声を合図に突入してきた自衛隊。

全てが快斗にはスローモーションのように見えて。どこか客観的にみている自分がいて、あまりにも現実味がない。

「……!!」

「快斗……」

抱きしめた青子の胸から、生暖かい血液が広がる。

名前を呼ばなきゃ！そう、思った。今呼び止めなければ。

しかし、どうしても、愛しいその名前を口にできなかった。

なぜなら、自分は「怪盗キッド」だったから。

「快斗……青子ね、快斗のこと、大好きだったんだよ？」

「……!!!!」

絶句するしか出来ない自分に腹が立ちながら、普段あれだけ冷静にものを考える自分の頭が、ちっとも役にたたないことにも腹が立つて。気づかぬうちに涙が溢れる。

頭を振って、いやだいやだと声にならない駄々をあげる。

「名前……よんで？」

青子が、薄れゆく意識を必死に留めて、キッドのモノクロに手をかけ、力の入らない指先で、外した。

青子は腕の中で笑っていた。頭の中で何かか切れる音がした。

大切で大切なこいつの名前を、「俺」に呼ばれることをこいつ自身が求めているなら……。

「あ……青子、なにやって……んだよ、青子、ああこッ！」

大切な青子にしてやれる唯一のことがただ名前を呼んで、気持ちをつづけるだけなんて、すっげー情けないけど、それでも、青子が望むなら……黒羽快斗として最期に名前をよんでやろう。

「アホ子！ははっ……俺、青子のこと……大好きだぜ」

「なによ、バ快斗……うん。……快斗、ありが……と。」

青子は最期にもう一度につこり笑って見せて、そのまま目を閉じた。

気づけば、回りでは自衛隊とスネイクとその部下の銃撃戦となっていた。

“怪盗キッド”は逃走した。

7 名前を呼んで（後書き）

やっと、あらすじの10文字目までたどり着きましたね・・・；
本当は、「パンドラ事件に巻き込まれて死んでしまいました」で、
物語を始めようか迷ったのですが、青子が好きすぎて簡単に死んだ
なんて言えなかったのもこのような形で進めさせていただきました。
このほうが、快斗の気持ち的にも深さを与えられるかな？と思うの
でやはり書いてよかったと思っています。

さあ、物語はここからです。

2011 4 / 7

次話は4 / 9 18時です

（書き溜めて、予約投稿で投稿しているのですが、もし、時の方
がいい！とかありましたらご意見ください）

誰も

俺、最期に笑って話しかけたつもりだったけど、ちゃんと笑えてたかな？

アホ子のやつ、ほんと、アホだな……なんで、なんで、なんで……。

うわああああああああああああああああああああ
ああああああああ！！！！！！！！

「しっかりしてください！坊ちゃん！！！」

「 ! ? 」

寺井の言葉で快斗が目を覚ますと、自宅だった。全身が鉛のように重くて、全身が裂かれたように痛い。

気づくと、全身が包帯とギプスだらけで、おまけに顔も腫れている気がする。

「坊ちゃん、今から、あの日起きたこと、あの日から私が調べたことを報告します。そんな気分じゃないかもしれませんが、どうかお聞きください」

• • • • •

寺井は筋道を立てて、はじめから説明し始めた。

あの日、パンドラを狙うあの組織が、月明かりに輝くクリアデイズを見て、パンドラだと確信。怪盗キッドに盗られる前に盗ろうと、外部に気づかれないように相当数の部隊を送り込み、壊滅させた。いいが、肝心のクリアデイズの防犯システムがやぶれなかった。そ

のため、人質を使い、怪盗キッドに開けさせ、奪うことにした。あの日、快斗がキッドではないと確信するために、そして、もしキッドだったとしても、危険を知らせるため青子は東都美術館へ来ていた。もちろん中には入れないため、外に一人でいるところをやつらに脅されて連れられたらしい。スネイクが撃った銃の音で、通報があつて待機していた自衛隊が突入。部下は全員逮捕され、スネイクは自決した。クリアデイズは警察に押収された。

「館内にいた警察官のうち42人が重軽傷を負いましたが、死者はいません。中森警部も頭を数針縫う程度で済んだそうです。・・・坊ちやま、その・・・青子ちゃんは・・・」

「死んだんだろ？俺のせいで」

「そんな・・・！坊ちやまのせいなんて！」

「わかつてる！全部わかつてるんだよ！！・・・悪いけど、一人にしてくれるか」

寺井は部屋から出て行った。

「どうやって、帰ってきたんだっけ、俺・・・ってか、俺こんなに撃たれてたのか・・・」

死んだんだろ？

自分でその言葉を使った瞬間、すべてを理解した気がした。

愛しい愛しいあの子は

笑うことも、泣くことも、喜ぶことも、怒ることも、すべてを失った。

奪われた。

「...俺、に...」

最期まで嘘を、つきつけてしまった。

すべてが終わったと言おうと思ってた、なんて、今となってはすべてがくだらない言い訳になる。

あの日、青子は、「大嫌いな怪盗キッド」に向かって、「快斗」に「名前を呼んで欲しい」と懇願した。

絶望、しただろうな。裏切られたって思ったかもしれない。ずっと嘘をついてきた。

大好きだったのに、今も、大好きなのに、そんな自分が殺してしまった。

愛していたのに、今だってずっと、愛しているのに、最期まで嘘をついた。

最期まで、謝れなかった。謝って、許してもらえないのが怖かったのかもしれない。

「嫌だ」そういわれるのが怖かった。

あの時、青子は「快斗」に向かって「大好き」と言った。

思わず青子に「大好き」と言った自分は本当に、「快斗」だったのだろうか？

今にしてみれば、それはあまりにも身勝手な「大好き」だったように思える。

「最低……俺。ごめんな、青子……」

いまさら謝っても報われない、自分も、青子も、誰も……。

自分のせいで死んだこと、守れなかったこと、最期まで嘘をついていたこと、最期まで快斗でいられなかったこと……すべてのことが黒羽快斗を、深い、深い闇に突き落とした。

黒羽快斗は、事件以来、学校に行かなくなった。もちろん、自身も何発もの射撃を受けていて、大怪我をしているのもあったが、とても、学校にいけるような精神状態ではなかった。

母も、クラスメイトも、誰も快斗にかける言葉が見つからなかった。それは、快斗にとっても都合のいいことだった。誰にも会いたくなかったし、こんな自分を誰にも見せたくなかった。

8 誰も（後書き）

自分で書いていて暗くなります本当に。

私自身は読むときはギャク多めの楽しいお話が大好きなんですけどね、どうして書くところなにキャラがずたぼろになるんでしょう（苦笑）

さあ、例の彼女に出会っのはいつになるかな・・・

2011 4 / 9

次回は 4 / 10 16時です。

9 最後のショー

「快斗坊ちゃん！いくらなんでも危険すぎます！お気持ちはわかりますが…」

「止めないでくれよ…？」

事件から二週間が過ぎたこのころ、テレビでは今も 未曾有の強盗事件。怪盗キッドとの因縁は！？ 中森警部の娘、強盗組織に殺害される 巨大組織VS警察 謎の組織にせまる

などと事件は大きく取り上げられ、警察も必死なつて捜査を始めた。その結果組織も下から解体され、下っ端から次々と逮捕されている。そして、警察に押収されていたクリアデイズはもとの持ち主、東都美術館の館長に返されることになった。

事件の後、事件現場となった東都美術館は検証のため関係者以外立ち入り禁止とされており、もちろん美術品の展示はされていない。クリアデイズは館長の自宅の地下金庫で保管されるらしい。

「あのとき・・・スネイクにクリアデイズを投げたとき、一瞬だけ月明かりに赤く光るクリアデイズが見えた・・・。間違いなく、あいつはパンドラだ」

「だったらなおさら…！組織も随分力が弱まっていますが、まだ残党はクリアデイズを狙っているはず。…そうですね、快斗ぼっちゃま、残党もじきに捕まります。そんな危険を冒してまで宝石を盗み出して、やつらを引き寄せる必要はなくなったのです」

そう、黒羽快斗は父親を殺した組織と、原因となったパンドラを壊

すために怪盗キッドになったのだ。

組織をつぶすという目標は、もはや達成できたようなものだった。それはあまりにも突然で、大きな代償を払ったことになったが。

「パンドラは……絶対に俺の手で壊す」

「……」

快斗は、パンドラを壊すことにこだわった。それが怪盗キッドの最後の目標であり、いろいろなものを犠牲にしていきたいまでの成果を、パンドラを壊すという目標を達成することで、認めてやりたいという気持ちだった。

なんのために、ここまでできたのか。その答えをつくりたかった。そして、怪盗キッドと決別しよう。そう思っていた。もう、嘘をつかなくていいように……。

ボレー彗星まで1週間、事は急を要した。警察から館主に宝石が戻されるのは今晚だった。

快斗は、ボロボロな自分にむちをうち、最後のショーの準備を始めた。

ショーは順調に進んでいった。そして、あまりにもあっけなく盗み出した。

最後にしては、味気なかったなと思った自分は、本当にただの愉快犯に成り下がってしまった気がして悲しかった。

もともと警察は大きな事件で人手がたりず、予告を出したのもギリギリになってしまったため、たいした対策もとれなかったのだらう。

「これで・・・終わりだ」

逃走ルートの屋上でいったん翼をたたみ、手の中で光るクリアデイズ：パンドラを見ながらつぶやいた。

今にも朽ち落ちそうな頼りない柵に体を預けながら、手の中のそれを月に透かしてみる。確かに透明だったはずの石の真ん中に、赤い石が光り輝いていた。

キッドには、「きれい」だなんて到底思えなかったが。

「こんなもののために・・・」

尊敬していた父は殺され、自分の人生は大きく変えられ、最愛の人を失い、多くの人を狂わせた。

「ははっ・・・不老不死、ね・・・」

あの事件から、青子が死んでから、自分の中の感情という感情が、海の底へ沈んだようだった。ただ、悲しみと絶望だけが漂っていた。そして今日、嘲笑という感情が、一つプカプカと浮かぶのだった。それしかもたない自分は、悲しみ、絶望し、自分と世界とそのほかすべてを嘲笑するしかなかった。

パシユツ・・・パシユツパシユツ

「・・・!？」

突然腕と太もみに走る電撃のような痺れと広がる熱。ああ撃たれたのかと、それ以外の感想はなかった。

「・・・お前の狙いはコレだろ・・・」

振り向くと、黒ずくめの女が立っていた。

「そう、よくわかつているじゃない。えらいわね、坊や？さあ、それを渡しなさい」

怪盗キッドは「嘲笑」すると、なんのためらいもなく「コレ」を上へほうり投げた。

月明かりに一瞬赤く輝き・・・。

パンツツッ！！！！

怪盗キッドはパンドラを撃ち抜いた。

9 最後のショー（後書き）

やっと、やっとですね。

いろいろと、急いでした感がありますが・・・。

わかりづらいところは加筆しますので、なんなりとご意見ください。

2011 4 / 10

10 さようなら（前書き）

この小説では、沖矢さんはいない設定になっております。

「…はあっ…っっ」

高鳴る心臓、噴き出す汗、震える手。

それでも自分は本能的に生きようとするんだなと、どこまでも貪欲な自分に幻滅する。

「…っっ」

腕、足、腹部、防弾チョッキのおかげで致命傷は免れているが、大量に出血している。

パンドラを撃ったあと、女の狂気ぶりに大変な目にあった。女は、何か訳の分からない言葉をわめき散らしながら、銃を乱射していたし、髪を振り乱し暴れるその形相はもはや人間では無い。

すぐに銃をトランプ銃で撃ち落とし、女を柵に縛る。女は自分が組織のトップだと言った。近づいてみると思ったより年を食った女だった。

警察を呼び、わめき続ける女をおいて、ハンググライダーで帰路につこうとしたが、なにぶん出血が多く、意識が危ういので工藤新一の自宅の二階のベランダから窓の鍵を開け、侵入させてもらった。たまたま近くに見えたのと、人が居る可能性が殆どないことがわかっていて工藤邸は隠れて休むにはちょうどよかった。

何度も手放しそうになる意識を必死に留めて周りを見渡すと、きれいなシングルベッドが二つとクローゼットがあるだけの、ゲストルームのようだとわかった。

「はっ…自宅で怪盗キッドがくたばってたら…名探偵、驚くだろうな…」

などと、不吉なことをつぶやきながら、ここからどうやって帰ろうかと、考えをめぐらす。

そのときだった。

ガチャリと玄関の開く音が聞こえた。

いくらあの名探偵は不在とはいえ、その両親はいつでもここに帰ってこれるのだ。

浅はかに侵入してしまったことがいまさら悔やまれる。見つかる前にここからでなければ、この手負いでは逃げ切るのは難しい。

「……………ち……………の……………」

一階で誰かの声がする。はっきりは聞き取れないが、女性の声で、気配からしておそらく一人。

（母親か……？）

とりあえず、逃げださねばと、音を立てないようにベランダへ出ようとする。

音を立てずに動くことも、逃げることも、もう随分慣れたことだった。

がたんっ……………体がよろけて、音をたてて転んでしまった。

（やつべえ・・・早く・・・でねえと・・・）

階段を駆け上がる音、そして・・・。

ばんツと、音をたてて開いたドアの先にいる人を見て、息を呑んだ。

「！っ・・・！！！」

そして、相手も心底驚いた顔をした。

「怪盗キッド!?」

それはそつだ。こんなところに怪盗キッドが倒れていたら、誰だつて驚く。

けれど、怪盗キッドが息を呑んだのは、人に見つかったからではない。

「ああ・・・っ・・・」

そう、そっくりだったのだ。愛しいあの子と・・・。

「・・・どうして怪盗キッドがここに?! どうしてこんなに血まみれなの?!」

（毛利、蘭・・・前に変装したことがある・・・工藤新一の、幼馴染・・・）

しかし、違う、とすぐにわかっていた。頭の中で、自分に言い聞かせるようにそっくりな彼女のプロフィールをつぶやいた。

毛利蘭は、あわてて駆け寄ってきた。何か自分に喋りかけている。だんだん頭がぼやけてくる・・・。

「救急車、呼ぶわね？」

そう言った毛利蘭の言葉に、「だめ・・・だ！」と答えるのが精一杯だった。

そういわれても、今にも死んでしまいそうな怪盗キッドをそのままにしておくわけにもいくまい。

「・・・ちよつと、ごめんね・・・」

蘭は、怪盗キッドをベッドに寝かせ、シャツのボタンを開け、一番出血の多いわき腹の傷にベッドのシーツを破ったものを当てた。そして、同じように、腕や、足など止血のできそうなところをシーツで縛った。

「・・・はあっ・・・」

キッドは、苦しそうに呼吸しながら、されるがままにしていた。

「大丈夫？・・・どうしよう、私、ちゃんとした知識がないから・・・！このままじゃ、あなたが・・・」

一応の手当ではしたものの、これがどれくらい役に立っているのかは不明だ。

「大丈夫・・・私は死にません・・・お嬢さん、お願い・・・です。このことを、誰にも言わないで欲しい・・・」

モノクルの奥の瞳は、真剣で、そしてか細い光を放っていた。しかし、今にも消えてしまいそうなほど・・・。

蘭は困惑して、立ち尽くす。

「って、無理か・・・俺、犯罪者、だもんな・・・警察に通報するのは、都民の義務、だ・・・でも、捕まるわけにはいかねえ・・・」

「・・・え!？」

急に変わった雰囲気と口調に蘭が戸惑った一瞬のすきに、ポンッと音をたてて、煙が上がった。

煙が引いたときには、もうすでに怪盗キッドの姿はなかった。

そして、もう二度と怪盗キッドが姿を現すことはなかった。

10 さようなら（後書き）

まだまだ納得がいていないのですが、急がないと量が三倍くらいになりそうなのでここらでやめておきます。

女性の声のフルバージョンは、「新一！ここにいるの？」です。

実は蘭は、新一が居ると思って工藤邸に来たわけじゃないのですが・・。

人の気配を感じたので、新一を探していたのです。

2011 4 / 12

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8010o/>

あなたの瞳のその向こう

2011年4月17日23時37分発行